



代表  
菊谷 勇

(きくたに いさむ) 氏  
神戸市出身。父親が、船舶エンジンの輸出を手掛ける会社を興したのが昭和48年。その後、今から5年前に父の後を継ぎ、代表に就任する。それと共に輸出品目を船舶エンジンから日本製の中古農業用機械に切り替える。当初は4、5カ国だった取引国も、現在は目標の30カ国に、そして1カ月に400台を輸出するまでに成長した。代表のフロンティア精神と相手国に合わせた柔軟な対処が開花したのであろう。

須磨産業

兵庫県三木市志染町三津田馬止 1525  
TEL 0794-87-1812  
FAX 0794-87-1813

Guest Interviewer  
加納 竜

「世界各国で日本製の農業用機械が使用されているなんて知らなかった。素敵な活用法ですね」

21世紀に向けて～躍進する人と企業

# 中古機械の輸出により 諸外国の農業発展に寄与

加納 須磨産業さんの事業内容をお聞かせ下さい。  
菊谷 私共では、農業用機械全般の輸出に従事しております。

以前は船舶エンジンの輸出を手掛けていました。当時はちょうど減船や二〇〇海里問題が上がり、国内の船が過剰気味でした。そこに着目し、昭和四八年、私の父がだぶついた船の部品を再利用しようとして会社を興したのです。その後、諸外国での農業用機械の需要の伸びに着目し、現在はトラクターなど、日本製の中古機械を輸出しているのです。

加納 フイリピンを訪れた時、日本製の中古自家用車や大型バスが走っているのを見かけたのですが、農業用機械も流通していたのですか。

菊谷 ええ。フイリピンは私共の主要輸出国となっております。農業国であり、発展を遂げている最中ですので、今後とも需要は伸びるでしょう。

加納 やはり、現地で作られた新品との競合となるのですか。

菊谷 いえ。新品だと価格が一〇倍にもなってしまうから、安価で高品質な日本製品は重宝がられるのですよ。

食料増産に寄与しているという名目から、農業関連の機械には輸入税がかからないのです。そのメリットを活かし、より良い機械の集荷に励み、諸外国の農業の発展に貢献できればと思います。

加納 中古機械の集荷はどのような手順で行っているのですか。



菊谷 日本製は比較的シンプルに作られていますので、案外と各国の用途に合わせやすいのですが、土地柄や事情が国によって異なりますから、その点を充分に

昭和四八年に、船舶のエンジンを輸出することを事業の軸としてスタートした須磨産業。時代の流れと共に急進した農業技術の発展を受けて、今から五年前、輸出品目を中古農業用機械に切り替える。当初は四、五カ国だった取引国も今では目標だった三〇カ国になる。その要因は、現地に積極的に足を運び、各国の土地柄、ニーズを汲んだ取引にある。今後は中国への輸出も構想中、益々事業の幅が広がっていきそうだ。

菊谷 大手メーカーさんから受注するシステムをとっています。また、数年前に新聞に掲載されたことがあり、それをご覧になった方からお話を載せております。

加納 リサイクルの観点からも、価値の高いことですね。しかし、各国に合わせてメンテナンスをなさるのは、相当大変だと思っております。

考慮しなければなりません。

例えば、先進国であるオーストラリアは、横転などにも耐え得るようにアゴを取り付けなくてはならないなど、規制が厳しいのですが、フイリピンなどは、できるだけ安く提供する必要があると思います。

加納 相手国によって、きめ細かに対応

●今、何を必要としているのか  
相手国の尺度に合わせ  
メンテナンスを施す



日本製の中古農業用機械の輸出に携わる須磨産業。現在は30カ国に上る国々に、土地柄や農業事情に応じてメンテナンスを施し、1カ月に約400台の農業用機械を輸出している。

経済状態などにより、相手国の要求するニーズは全く違い、それに応じてメンテナンス方法も変わってくる。そこで、代表は現地に足を運び、輸出した品物の様子を確認すると共に、「今、何を必要としているのか」という現地のニーズを肌で感じるようにしているのだという。取引の際に決めているのではないこと、それは「日本人としての尺度のみにとらわれる」ことだと菊谷代表は言う。新しく取引を行う国に積極的に足を運び、懐深く入っていく。これぞフロンティア精神の実践である。

中国への輸出にトライするという大きな目標を間近に持っている須磨産業。きっと、中国の「今」にベストフィットするメンテナンスを施し、大陸の農業の発展に貢献することだろう。

